Published by Tokyo Gakugei University.

自然の中で遊ぶこと、それがとても楽しいことだと感じてほしいのである。

■場所

①多様な自然環境があるところ

②様々な自然体験ができるところ

③近いこと

④混雑していないところ

⑤安全性を確保できるところ

■スタッフの役割

場所が決まったら事前に実地踏査をする。どんなプログラムができるか、また、食べられる木苺の季節等、そこの自然状況に合わせた時期を考える。当日、スタッフは多いほどよい。教員だけでは不十分な場合、保護者や地域からボランティアを募る。スタッフはプログラムによるが、手助け、助言者に徹する。もちろん子供の安全を配慮するが、過度になってはならない。

■プログラム

表1に示すように、子供たちがやりたいことを選ぶ。

時刻	内容
9:20	山登り - キイチゴ、クサイチゴを食べる
10:00	ひとりぼっち体験
10:30	急斜面をロープで降りる
10:40	横沢入りで自由に遊ぶ（選択プログラム） 1. 川遊び（生き物採り）・洞窟探検 2. ロープ遊び・木の実、草の実を食べる 3. その他 お弁当（遠官）
13:15	横沢入り出発
15:00	学校到着

表1：横沢入り遠足 1993年6月 東京都小金井市立緑小学校

写真4：東京都あきる野市横沢入り

6. 環境学習の実践例
より豊かな自然へ　移動教室

宿泊を伴うので、できるだけ自然体験ができやすいところへ、出かけよう。自然豊かな農山漁村は文化を学ぶ上でもお勧めである。ここでは、典型的な日本の山村で行われた移動教室の実践例を紹介する。

プログラム	主な内容
自然散策	雄滝・しおじの森・源流探検
小菅小学校児童と交流	・村内ウォークラリー （地元の小菅小学校の 5.6 年生と一緒に小グループに分かれ村内見学） ・雑穀収穫体験（キビ、アワ、等） ・たねあな見学
山登り	山頂から小菅村の様子を見る 木の実、動物の足跡、食痕の観察
ナイトハイク	都会にはない暗闇を体験
星空観察	天の川、夏の大三角など観察、流星も
畑見学	急斜面の畑見学　コンニャク・サトイモ・トウモロコシ・モロコシ等畑の持ち主に話を伺う
蕎麦打ち体験	民宿のおばさんに蕎麦打ちを教わり 自分たちで作ったそばを昼食に食べる
農山村の生活体験	雑穀や郷土料理を食べる
その他	ヤマメを焼くお手伝い ドラム缶風呂入浴

表2：農山村での移動教室（町田市立大戸小学校、2008年～2010年）

ここでの活動は NPO 自然文化誌研究会に全面的にコーディネートしてもらい教員は引率する形をとった。

◀村内ウォークラリーで地元のおばあさんに昔の遊びについて話を伺っているところ。初めての調査体験。事前に NPO で子供たちが来ること、内容等については打ち合わせをしてある。

◀NPO のコーディネートで彼らの雑穀見本園でアワの収穫体験をさせてもらっているところ。地元小菅小学校の児童も一緒に参加した。

小学校での
環境学習の実践の仕方

Way of the practice of environmental learning in the elementary school

中込卓男
NPO法人自然文化誌研究会　代表理事

1．小学校での環境学習の現状

環境学習の必要性が言われ続け、一部の教員の間で環境学習が行われてきた時代が長く続く。その後、平成１０年に「総合的な学習の時間」が新設され、「環境」が「国際理解」「福祉・健康」「情報」とともに示され、環境教育が重視されるようになった。環境教育指導計画も各学校で作成することが教育委員会から伝えられ、「総合的な学習の時間」「生活科」を中心に、他教科の合科的な学習として環境学習は実施する形を整えた。しかし、私の知っている限り多くの学校では、環境学習はあまりやられていない。学校教育の現場では、日々の教科学習に追われている。教科書を使っての教科指導が最優先であり、6年理科「生物と環境」と、「総合的な学習の時間」の中で細々と実施されているぐらいである。また時代とともに様々なことを実施せよと、学校の現場に持ち込まれてくる。多くの教員は、環境学習もその様な流行のひとつとしてとらえ、研究指定校や関心を持っている一部の教員しか環境学習を行っていない。その後「教育基本法」の改正、持続発展教育（ESD）新学習指導要領（平成２３年度実施）と環境学習を学校教育に取り入れていく方向で動いているが、「総合的な学習の時間」は、週３時間が２時間に減り、追加された例示もあり、学校現場では環境学習を行うことが以前より少なくなった感がある。

このような現状から、「環境科」を新設していくことが必要であると考える。しかし、現状では各教科等で行うことになっている。そこで、多くの教員が取り組みやすい環境学習の実践例を紹介していく。

2．小学校で環境学習を進めるにあたっての考え方

①感性を育む

子供たちの心の驚き、感動を大切にする。教員はそのためにいろいろな体験活動の場を準備する。自分でできなければ、コーディネーターとして動き、地域やNPO等とかかわる。

②自然の中で楽しみ、親しむこと

子供たちが自然の中で遊ぶことが楽しいと感じるプログラムが必要である。まずは子供たちに自然を好きになってもらうことである。

③自然と文化

持続可能な社会を目指すために、自然だけでなく、その中で共存してきた文化から学び、これからに生かしていく。アイヌ文化や少数民族の生活文化から学ぶことは多い。

④野外活動・直接体験

テレビ、ゲーム、パソコン等バーチャルな世界が広がる中、知識より実際の野外、自然の中で直接体験する活動が重要である。実際にやってみると多くのことを感じることができる。

⑤ゆったりとした時間の中で

自然に親しむには、日常の人間社会の秒刻みの時間から離れ、できるだけゆったりとした時間と空間が必要である。

⑥地域の自然を生かす

子供たちにとって最も身近な地域の自然に目が行く活動プログラムを行う。

⑦地域とのネットワーク

地域にはさまざまな活動を行っている人たちがいる。そんな方々と積極的にかかわる。協力してくれることが多い。

⑧子供が価値観・倫理観を持てるように

環境学習は子供たちの心を育てることを目指さなければならない。

3．環境学習の実践の場について

まず、身近な所から始めて、機会があれば豊かな自然環境のところへ出かけて行く。（図１）

各教室や空き教室やスペースなどを使って、展示やミニ博物館、○○センター等を作り、楽しい活動ができる。

校庭では、池作り、堆肥置き場、畑、植樹、花壇等ビオトープ作りを子供と一緒に行い、日常的に環境学習がやりやすく、子供たちにとって魅力的な場を作る。

身近な自然である地域の雑木林・神社・河川・用水路・公園・施設等に出かける。年間を通して出かけ、そこで自然観察路やマップを子供と一緒に作ったり、「○○小　八景」を作ったりしてみる。

以前は遠足、今では校外学習といわれ、地域の川原へ出かけ自然観察することも含まれるようになり、学校外で学習することが容易になった。お弁当を持ちバスや電車を使い、まる１日をかけて出かける。年１、２回行われるこの活動を環境学習に活かそう。

５，６年生になると１泊、２泊宿泊を伴った移動教室が行われる。遠くへ行けるのでより豊かな自然や農山漁村へ出かけ、環境学習を行う良い場となる。

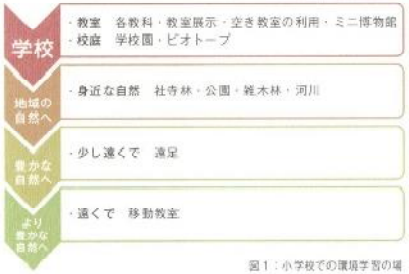

図１：小学校での環境学習の場

4．環境学習の実践例①　校庭　ビオトープづくり

自然がどんどんなくなっている今日、学校の校庭も従来の運動場という考え方から、いろいろな生き物が生息し、人と共存出来る場所にしていく必要がある。子供たちは休み時間、毎日ボールを蹴り、ブランコや滑り台で遊んでいる。このほかに、虫取りをしたり、木の実、草の実を食べたり、池のオタマジャクシと遊んだり、カナヘビを探したり、カブトムシを呼ぶための堆肥場を作ったり、お気に入りの花壇や畑を作ったり、秘密基地を作ったり等の遊びを加えていきたい。

放課後、学習塾、スポーツクラブの習い事やゲームで遊ぶ子供がほとんどで自然体験塾はほとんど流行らない今、子供たちの最も身近な校庭に、いろいろな生き物がいるところ（ビオトープ）を作る意義は大きい。そこで日常的に遊ぶことが子供たちの感性を豊かにすることにつながる。

写真１：東京都町田市立大戸小学校　ビオトープの池

●ビオトープづくりの実際

校庭につくるビオトープといってもいろいろあるが、主に次のようなものが考えられる。

- 池・野草園・雑草園・野鳥・ミニサンクチャリ・果樹園
- 多孔質空間・畑・プールの利用・屋上、
- ベランダの利用・外壁緑化・緑のカーテン・雑木林等

いずれにせよ、大切なのは子供たちが自分たちで作っていくことである。教員は子供の手に負えないところの手助けを行う。地域の人に一緒にかかわってもらうとさらに啓蒙につながる。小金井市立緑小学校のように、荒れてしまったビオトープの池を地域の環境市民会議の方が中心となって子供たちと復活させた。現在は、池の維持管理も行なってくれている。業者に外部発注して、夏休みが終わったら池ができていた、しかも鍵付きのフェンスに囲まれ子供たちが自由に入れないという事例がかなりある。ゆったりとした時間でのんびり楽しく子供たちと一緒に作ればいいのである。作っていく過程が子供たちにどれほど環境学習になっているかを認識すべきである。学校は色々なものを作ったり改良したり、子供たちがいろいろ試み実験できる場でなければならない。

（池の作り方）

①穴を掘る

②ビニールシートを敷く

③土を２０cm ぐらい戻し踏み固める

④水を入れる

⑤木道を作る

⑥植樹

写真２：小金井市立緑小学校　卒業制作で池を囲っている６年生

池を作ったら、更に池にいろいろな生き物たちがやってくる工夫を子供たちと考え実験的に取り組んでみる。写真３は動物、人、自然の３つの共存を考え、命を感じる「ふれあい広場」である。子供たちが自由に訪れ、ゆったりとした時間を過ごしている。桑の実、ユスラウメ、ヒメリンゴの実を食べ、ヤギや　ウサギの世話をし、池にオタマジャクシやトンボを追い、草むらでバッタを捕まえる。８年かけて子供たちと地域の人たちで、手作りしたものである。

写真３：町田市立大戸小学校の中庭に作られたふれあい広場

5．環境学習の実践例②　身近な自然　少し遠くへ　遠足

ディズニーランドが好きな子供は多い。何回行ったと自慢げに話す子供同士の会話を聞くことがある。その度にディズニーランドに勝る遠足をやりたいと思ってきた。「ああ面白い。また来たい。」と感じさせる意義は大きいのである。